



数学の教師をしていて、方程式や関数などを教えていると、必ず毎年何人かの生徒がきまって「こんなこと勉強して、将来何の役に立つんですか？」と口にする。私はきまってこうハツタリをかませている。

「オレは数学を教えるんじゃないんだ。数学を通して人としての生き方を教えるんだ。つまり、人間としての器の大きさやバランス感覚についてだ。詳しく説明すると2時間はかかる。説明してほしいなら放課後残れ。何？残りたくない？それなら話は早い。オレの授業を1年間まじめに受けていればその答は見つかる。世の中なんて足し算と引き算くらいできればとりあえず生きていけるだろう。それでいいなら、オレの授業はずっと寝ていても構わない。決して怒らない。今の時点で数学を勉強する必要がないと判断するなら遠慮せずそうしてくれ。」

こう言って反旗を翻す生徒は皆無だった。でも、実際に放課後残って私に説明を求めた生徒が……いや、たった一人だけいた。話し始めたら、まじめで頭が固く理屈っぽい子で、いろいろ問答を繰り返して、ようやく納得してくれるまで、本当に2時間もかかった。疲れ果てた。でも、私が、部活動そっこのけで嫌がらずに時間をかけて相手したことで、それ以来その生徒は、私をとことん信頼して接してくれるようになった。

その子は、5年後、超難関の大学医学部に進学する。中学校卒業式当日、「先生のおかげで数学が好きになりました。医者をめざします。なれたら、今度はジュースじゃなくて大好物のオムライスをおごってください」と言った。そう、コンビニで私に話しかけてきたあの女の子だ。残念なことに、その約束は未だに果たせていない。

そして、私はこう思うのです……………

「教育」とは、教え育てるのではなく、共に考え共に育つ「共育」なのでは。「教師」とは、教え導く指導者ではなく、共に悩み共に考える「共師」なのでは。

というつもりで、私たちは子どもと接する必要があるような気がします。私たちもそして保護者も、単に年齢が上だということ、人生経験が長いというだけで、教え子や我が子には、ある意味傲慢な存在に映っているのではないのでしょうか。

当然、威厳とプライドは保ちつつ、子どもの声に丁寧に耳を傾け、同じ目線で子どもに接しながら、子どもと共に成長する存在でありたいものです。生徒は、いつまでも子どもでなく、我々が思っている以上に、すさまじいスピードで大人の階段を駆け上っています。